



平氏の戀と源氏の戀

永代美知代

▽中將、中納言局を戀ひわたる

故太政入道平清盛朝臣の公達に、三位中將重衡卿と云ふのがある、北の方は大納言佐殿とて、美人の聞え洛中に高き上臈であつた。さても御夫婦のなかに御子一人もなく、こればかりを物足りなく思つてゐられたが、ふとした事から内裏のさる女房と知り合つて、互に憎からずおぼすうち、何時の間にか公達一人を設け、愈々離れ難ない戀仲となつてしまつた。

さしも昇る旭と輝いた平家の武運も日に月に衰へ重衡卿は西國の敗軍に、云ひ甲斐なくもとらはれの

身となつて、再び都へ歸り上り、生きながら故郷に恥を曝らす憂目を見なければならなくなつた。勿論自ら企ててした譯ではないが、南都東大寺を兵火に炎上せしめ、數多の佛像經卷を焼きほろぼした報ひなれば、どうせ宿運のよからう道理はなく、かうなるのも佛罰故とあきらめては居るが、未來までも空怖ろしい事に思つて、たゞく身の不運を嘆くばかりであつた。

郡には親しい者共も少くはなかつたが、それらに顔見られるのも情けなく、落ち目になつた今日、先方から會はうと云ふ程の物好きもあるまい、とは思つたが、重衡卿は心の奥深く、是非今一度今生の思

ひ出に、たゞの一目だけでも出會つて見度いと思ふ戀しい女があつた。然りながらとらはれの身の、そのやうな贅澤はなり難い、どうしたものかと明暮れ一人で思ひなやんでゐた。

丁度その時、以前の家來で、平家の都落ちの時病氣してゐて、重衡の供をするこ

ひ置き度いと思つたが、何しろあのやうなあわたしい折柄で、何も彼も取り敢へぬ事ばかりであつた。今度都へ歸つて、せめて手紙でも送つたらと思ふのだが、恥かしい今の身分で使ひが無い、友時、汝その女の許まで手紙を持つて行つては呉れまい



重衡のナツクス

「お易い御用で御座います」
其處で使者は出來たが、一應警固の者共へ其由を云つて頼まなければならぬ。眞實籠つた重衡卿の言葉は、頑固な東夷の心を和らげて、全く女への手紙と云ふなら仔細ないと云ふ事になつた。

將重衡は傍近く呼び寄せて、今昔の物語に涙を絞り合つたが、やがて重衡卿は堪へ難い心の秘密を打ち明けた。

「のう友時、實はの、此方には内裏に年頃馴れ親しんだ可愛い女がある。都落ちの時にも何とか一言云

細々と情を盡した重衡卿の手紙を持つて出掛けた友時は、ふと考へつた。その昔平家繁昌の頃こそ互に愛するまじと、深くも云ひ交したれ、武運抽く弓矢の神に見離された重衡卿を、今もなほ女の方で慕

つてゐるか如何が怪しいものである。然るに心變りのした女の許へ、色男振つた手紙など持ち込んで、主人に恥をかかすやうなことがあつてはならぬと云ふので、そつと物陰にかくれて様子を観つた。すると女の方でも重衡卿を忘れ兼ね、召使の女共を相手に昔話をしては、重衡卿の上を案じたり怨んだりしてゐるので、友時は案内を乞ふて手紙を差出した。手紙の奥には「涙川うきなを流す身なれども今一しほの逢ふ瀬ともかな」などと言ふ歌が認められた。女は悲しさに打伏して泣き沈んだが「君ゆゑにわれもうきなを流しなば底のみくづと共にならばや」と返事の端に書き送つた。

一體此女と云ふのは櫻町中納言家の令嬢で、中納言局と云つた。云ふまでもない至極の美人で、年は二十一、琴、琵琶、繪畫、花結び、帯しくも當代貴女の心得べき遊藝の一つとして出来ないものは無い。それに名有ての歌詠みで、然ればこそ大納言佐殿と云ふ立派な北の方が有りながら、三位中將重衡卿

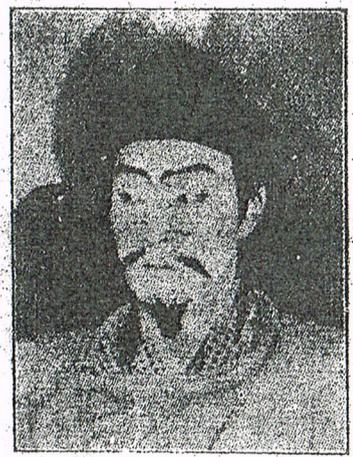
も、殊にわりなく思ひ入つた譯なのである。戀しい、戀しい女から「君故にわれもうきなを流しなば底のみくづと共にならばや」と斯うした歌を貰つた重衡卿、居ても立つてもゐられぬ程會ひ度くつて堪らない、警固主任の土肥次郎を説いて、女を内裏から呼び寄せて對面させて貰つた。何がさて平家の公達と内裏の上臈とのいき筋である、優にやさしい戀の場面が演ぜられた事勿論である。然りながら兎角浮世はままならぬが定である。捕虜の重衡卿は何時まで戀しい女と名残を惜しむ譯にも行かすとう／＼遙々關東に送られて鎌倉殿の所刑を待つ哀れはかない身となり了つた。

▽千手、伊王に目もくれず

鎌倉殿は當時兵衛佐として、朝廷の御覺え目出度く昨日の流人は今日の將軍、威勢おさ／＼そのかみの平氏に劣らず、重衡は今にも首はねらるるかと思ひの外、狩野介と云ふ者に預けられ、懇ろにもてなせ

よとの事であつた、早速結構な湯殿をしつらへてお湯をすすめたり、お湯に入つておれば、二十才ばかりの美しい女が目結の帷に白い裳と云つた、當時流行のいきな服装で、お垢を流しませうとやつて来る。これは兵衛佐殿から特に仰せつかつて、何彼とお氣に入るやうに御用を勤めに來させられたもので夕方になると、今度は二十四五の年増の美女が、地白の帷に染付の裳と云つたこしらへで、金物打つた様に新しい櫛道具を取揃へ、お髪をあげませうと云つて来る。夜に入ると酒を勧めて酌取りには晝間の若い方の女を出し、徒然を慰めん料にとて今様を歌はせ、舞を舞はせ、更にお伽を申上げるやう申合めたが、女は當時鎌倉に名代の美女千手の前、重衡卿も共々に樂を弾じ、朗詠などこそしたれ、一向に立入つた御用を命じることをしてない。

「ナニそんな事があるものか、折角此頼朝が粹を利したのに、お前は案外な嘘つきだ、それとも全く何事もないと誓言出来るか如何ぢや？」
兵衛佐殿顔色を變へて怒り立てた。併し千手は矢張り前の通りに否定して、自分の言葉に萬一嘘偽があるならば、江柄足柄伊豆箱根、目の下におぼさる程の八百諸の神々の憎しみを受けても構ひませんと、キツパリ云ひ切つた。
「え、残念な、千手程の美人も三位中將殿には嫌はれたか、それでは頼朝の家には美人がゐないと思はれるのも口惜しい、今一人美人を探し出し、何が何でも氣に入らせね、承知が出来ない」とあつて此度は伊王の前と云ふ



八百蔵の友時

當年二十歳になつた、みめ容の美しいのを御傍の御用に差上げた。素人の女で今様だの朗詠だのこそ出来ないが、琵琶も琴も上手で、歌連歌何でも心得てゐるやさしいものである。重衡卿も千手と云ひ伊王と云ひ、頼朝は流石に美しい女を澤山かかへてゐると思つて、夜通しいろんな話をするのであつたが、兵衛佐が望むやうな御用はこれにも仰せつけなかつた。

『どうぢやない伊王、昨夜の首尾は？』斯う訊いた頼朝は、案に相違の伊王の返事に『さて、汝も嫌はれたか？』

暫らく呆れ返つてゐた兵衛佐殿、やがて膝を叩いて曰く。

『流石は重衡卿ぢや、千手にしろ、伊王にしろ、あれ程の女を見て心を動かさぬ者のあらう道理はないだが重衡卿は今敵の中にゐて、はしたない眞似をするでもないと思はれたのぢや、流石は平家の公達、武くもやさしい心ぢやないか、併しながら此儘淋し

い思ひをさせる譯にも參るまい、これからは千手と伊王と毎夜交代に參つてお伽を申せ』

其處で二人の女は鎌倉殿の命令通り今年の卯月一日から明る年の六月上旬まで、代り番々に三位中将の御傍に伺候した。其内に重衡卿は南都に渡され遂に斬られてしまつた。千手と伊王は深くも中將殿を慕ふて、千手は二十三、伊王は二十二の若盛りを重衡三年の遠忌に、ふつとり緑の黒髪を切つて二人一緒に尼になつた。

それは後の話だが、折角氣を利かせて勸めて呉れる美人に情けもかけず、寶の山に入りながら手を空しうするが如き重衡卿の心と態度を、流人の當時すら伊藤の娘に手を出したり、兎角下品な眞似ばかりする佐殿には、一向合點の行かぬに無理もない、重衡卿には都に残し來つた内裏の女房との戀がある。東の間も忘れ兼ねる其戀にかたて加へて、明日をも知らぬ敗殘の身に、どうして年若い女に新しい歎きを見せるやうな殘忍な事が出来やうぞ、改めて云ふ

までもない、重衡卿は深くもものあはれを知つた平家の公達である。

▽美男なれども淺間しい義仲

此處に一人源氏の爲め、いささか人意を強うし得る色男がある。それは音に名高い九郎判官義經として武勇無雙、而して情けに厚い御曹子である。然しながらその戀の對象は白拍子静と云ふ賤しい身分の女であつた。

平家没落後世はあげて源氏のもの、よしや昨日まで東夷と嘲笑されたればとて、その權威と武力を以てせば、如何なる公卿雲客の上臈姫君をも手に入れる事が出来たであらうに、源の朝臣頼朝公すら、征夷大將軍の顯位にあつて、僅かにその下人たる梶原が娘政子を北の政所とあがめ奉つて、おまけに一

生政子の前に頭が上らない。

平家の公達の優にやさしく、萬事お上品な戀物語に引きかへて、これは又何と云ふ源氏の人々のみす

ぼらしさぞ。

其處へ行くと、木曾の冠者義仲は、飛び離れてエライものである。彼は極端な田舎侍で、如何にして物を知らぬ武邊一遍の男であつた。源平盛衰記にも『木曾の冠者義仲は、貌形は清げにて、美男なりけれども、堅固の田舎人にて、淺猿く頑にをかしかりけり。信濃の國木曾と云ふ山里に、二歳よりして二十餘年が隠れるたりければ、人に馴るる事は無し初めて都の人に馴れそめんに、なしかは誠によがるべきかたくななるこそ理なれ』とある通り、都へ出て來た義仲は全く變なものであつた。或る時猫間の中納言光隆卿と云ふのが、一寸とした用事で義仲を訪問した事があつた。すると家來の取次ぎを聞いた義仲は田舎訛丸出しでこんな事を云つたものである。

『何、猫が來た、あの鼠を捕る猫かい、乃公は旅ぢやで、持ち合せの鼠もないが、猫は何の用事で來たのかな、それとも人間を猫と呼ぶ事も稀にはあるも

「のかしら？」
 不思議に思つて家來に訊かせる時、光隆卿のお供の雑色が、猫間は土地の名で、其猫間にゐる中納言だから猫間の中納言と云ふのである。丁度信濃の國木曾と云ふ處にゐる故に、木曾殿と云ふやうなものだと親切に教へて呉れた。

それから又いろ／＼をかしい事が澤山ある。義仲が宮中へ出仕せんとして、狩衣に立烏帽子を着て、初めて牛車に乗つた時など、乗り習はぬ車に、着なはぬ装束だから堪らない。立烏帽子の先から、指貫の裾まで、まことにきこちなくて、おまけに牛飼は平家内大臣の童を取つて仕つたのだから、故主の敵ぞと、亂暴に取扱ふと云つた有様、様子の解らない車の中でのげ様に轉んで、止める／＼と怒鳴つても牛飼はわざと烈しく馳けさせる、義仲は狩衣の頸で喉を強く引き詰め、全身汗みどろになつてしまつた。して御所へ行き着いていさ降りると云ふ段になると、何處から降りて可いものか、それさへわきま

へず、突然後ろから降りてしまつた。車と云ふものは、後ろから乗つて、前から降りるものだと、雑色が注意したが、義仲は無理から我を通して後ろから降りるのであつた。



芝翫女の御前

▽源氏の殿原としては破天荒の戀

斯うした田舎侍の意地つ張りの強い義仲が、都の上臈をかいま見て、ぞつと戀風に裏はれたのも、滑稽と云へば滑稽だが、蓋し御安直主義の源氏の殿原としては破天荒な戀である。
 義仲には巴御前と云ふ妻がある。大力無双、その勇敢なること實に千古に稀なる女にして、木曾義仲が最後の軍に引添ふて、百餘騎が僅かに七騎となる

までも奮闘に奮闘をしまつた。
 女だてらに戦にまで出掛けて、おまけに荒馬乗り的大力尋常のものにあらずと云へば、定めし力士のやうに肥つた醜い婦とも想像されるが、その實は然らず、都を出て、四宮河原から粟津へ向けて、敗殘の數騎と共に落ちのびた其時が、丁度生年二十八歳の女盛り、紫隔子を織りつけた直垂に、菊閉滋く萌黄系絨の腹巻に袖付けて、五枚甲の緒をしめ、三尺五寸の太刀に廿四さした眞羽の矢の射残したのを負ひ、重藤の弓にせき弦かけ、連錢革毛の馬に全覆輪の鞍置いて、七騎の先陣に進んでゐたが、何と思つたか巴御前は急に甲を脱ぎ、長に餘る黒髪を後ろへさつと打ち亂して、額に天冠をあて、白打出の笠を着た。此時遠江國の住人内田三郎家吉なるもの三十五騎を引きつれ、巴に向つたが、内田は巴を遙かに望み見て「敵は重か但しは女か」と云つた。これに依つて察するに、巴は骨組みの細つこい、極めて華奢な姿の好い女であつたものらしい。

巴程の女なら、武將の妾として誠に申分なしである。併し巴は義仲が乳母の娘で、身分から云つて、京の上臈、松殿の息女に及びもつかない。
 たとへ三日天下の罵りはあらんも、義仲が上臈しからの勢はすさまじいもので、義仲は自ら攝政關白の官にまで登つた。當時松殿の息女と云へば、都に双無き美人の噂が高く、年は十七、行々は女御后にもと親達は掌中の玉といつくしみ、楽しんでゐるのであつた。噂を聞き、美しい姫の姿をかいまみるまゝ、義仲は暴威を以て無理から奪つて得となつたが、姫の方で愛情のなかつたことは察するまでもないことと思はれる。而も義仲は全く夢中になつて、義仲追討の軍の身に迫る



芝翫女の御前

早急の場合にも、なほ戰場に向はうとはせずして、
五條内裏に姫と名残を惜しみ、また立つ事の出来な
いまで、あつたら貴重な時間を潰してしまつた。

貴族的ラヴと安直主義の戀

これを要するに平家の公達は生れながらにして貴
婦人に好かれる素質を持つてゐた。そしてその戀は
貴族的であつた。源氏の殿原とて、女に好かれな
いと云ふではないが、その女が多く下人、白拍子の類
で、やんごとなきあたりの貴婦人をば、高嶺の花の
及びもない事と、てんから詔らめてゐると云つたか
たちがあつた。たまく義仲の如く、暴威を振つて
までも近づいた女には、先方から何等の愛情もなく
その戀は實に悲惨極まるものであつた、知らず源氏
と平氏と、貴族的ラヴと安直主義の戀と、當事に
は果してその何れが興あり、意義あるものであつた
か――